新版古生物学の完結と地史学・古生物学書の伝承

小林 貞一

Palaeontology, New Edition in 4 Volumes, 1973~78 and
Text-Books of Palaeontology and Historical Geology
Published in Japan since the Meiji Era

Teiichi KOBAYASHI

この春新版古生物学IVが朝倉書店から出版されて、昭和48年にIが出て以来の本書に対する要望が漸く満された。

編集責任者となって古生物学上の劃期的な大著が相次いで刊行された。また、Treatise on Marine Ecology and Palaeoecology, 1957や The Fossil

発行年	編 者	執筆者数	頁 数	内 容
1973	浅 野 清	15人	401	1. 総 論——7. 軟 体 動 物
1974	松 本 達 郎	10人	441	7. 軟 体 動 物——11. 腕 足 動 物
1975	鹿 間 時 夫	5人	527	12. 棘 皮 動 物——18. 所 属 不 明
1978	藤 岡 一 男	8人	456	19. 古 植 物 概 説——25. 胞 子・花 粉

全4巻の執筆者は33人で総頁数は1825頁であって、1954、57両年に出た旧版の古生物学上下2巻、22章、831頁を14人が分担したのに比べると、2倍以上の規模になっているが、そのうち4人が新旧両版に共通しているのみで、大部分が新人の手になったもので、更にその内容を見ると文字通り新版としての様相を展示している。まず総論を見ると旧版の15頁は1人で書いているのに反して、新版では執筆者も4人となり、分類の原理・研究法・古環境・化石層序学、特に化石帯などが詳しく述べられている。それに比べると進化論の割り当てが少いが、総頁数の制約もあろうし、殊に鹿間時夫著 進化学—古生物学的にみた進化—496頁、朝倉書店、昭和36年、その他がこれを満たしている。各論の章別としては古杯動物・コノドント類・胞子花粉の3章が新に設けられている。そして新版ではそれぞれの章の概説的な部分が特に豊かになっている。

旧版発刊から新版完結までの約20年を中心としてその前後に欧米では R. C. MOORE, J. PRIVETEAU, Ed. BOUREAU, Yu. A. ORLOV らが

Record, 1967などの貴重な総括的出版物が続出した。我国でも最近約30年間の古生物学の進歩は目醒しく、花粉学やコノドントやナンノプランクトンなどの新分野も大きく開拓された。新版古生物学はまさにこれら内外の新知識の上に立って執筆されたのである。

この古生物学新旧両版の姉妹出版物として同じく朝倉書店から出版された地史学2巻がある。旧版は昭和27、28年に10人が執筆、改訂新版が昭和42年1月と7月に執筆者14人によって著作出版された。

横山又次郎先生が化石学教科書3巻を著されたのは明治27年(1894)であった。これを古生物学と改題して明治40年に出されたが、その後間もなく絶版となった。そして大正9年に至って先生は古生物学綱要を出版された。先生はこれらの著作と平行に明治29年に地質学教科書を、31年に前世界を出された。そして大正7年1月に前世界史を出版されたが直ちに絶版となり、6月には再版されている。この種出版物が如何に要望されていたかはこの一事からその一端が覗われる。当時 Karl

von ZITTEL の Handbuch der Paläontologie, 1876~93や Grundzüge der Paläontologie, 1895, E. KAYSER の Lehrbuch der Geologischen Formationskunde その他の参考文献があったとはいえ、明治・大正年間に古生物学綱要と前世界史を著作されるには、なみなみならぬ労作を要したと思われる。特に化石の学名や地質学・古生物学上の術語はいちいち語源を調べて訳語を作っておられ、化石の分布、地層の対比などで日本およびアジアに関する部分の補筆充足は容易ではなかったであろう。これらの用語は「地質学」・「古生物学」では出来るだけ踏襲すべきである。

大正15年には早坂一郎が日本地史の研究を著し、日本の化石を地質時代の順に紹介した。次いで昭和初期には岩波講座の地質学・古生物学のうちで、地質時代ごとに、また化石の諸部類につい

て、大勢の執筆者が思いおもいに小冊子を書いた。その夫々が興味ある参考書ではあったが、しかしこれらを通じての一貫性は欠けていた。

最近30余年間に地史学・古生物学に関する単行本は可なり多く出版された。しかし両学の全体系を示す専門書の完結は特に重要であるが仲々容易ではない。今横山先生の Petrefaktenkunde の訳ともみえる化石学教科書から古生物学綱要、あるいは Grundzüge der Paläontologie を経て、今日の古生物学、それは現生生物学、すなわち Neontology に対応する古生物学の新版が出来たのである。章別にこれを見れば多少の出来・不出来はあろうとも、全体として現在の最高水準に達していると見られる本書が今後日本の古生物学の発達に寄与するところは少くないであろう。

(1978年5月31日受理)